

『徒然草』 「花は盛り」に「段の」大路見たるこそ

佐々木 勇

一、「花は盛り」に「段の論旨と本稿の目的

0. 『徒然草』の「花は盛り」に「段

本稿で採り上げる『徒然草』「花は盛り」に^①は、『徒然草』の中でも特に著名な段である。下巻の巻頭を飾る本章段は、教科書教材として採用されることも多い。

まず、『徒然草』第一三七段を、烏丸本を底本とする『日本古典文学大系』（一九五七年、岩波書店）から、具体例を省略しつつ引用する（校注者が補った送り仮名・振り仮名は略し、校注者による段落分けもしない。傍線引用者、以下同じ）。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。（中略）。萬の事も、始終こそをかしけれ。（中略）。すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。（中略）。片田舎^{かたがは}の人こそ、色こく萬はもて興ずれ。（中略）。さやうの人の祭見しさま、いと珍^{めづ}らかなりき。（中略）。たゞ物のみ見んとするなるべし。都の人^{みやこ}のゆゑ、しげなるは、睡て、いとも見ず。（中略）。何となく葵か

けわたしてなまめかしきに、明はなれぬほど、忍^{しの}びて寄^よする車どもの床しきを、それか、かれかなど思ひ寄^よすれば、牛飼・下部などの見^み知れるもあり。をかしくも、きら／＼しくも、さまざまの行交^{ゆきま}ふ、見るもつれ／＼ならず。暮るほどには、立て並べつる車ども、所なく並みぬつる人も、いづかたへか行^たきつらん、ほどなく稀^{かた}に成て、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾^{すだ}、疊^{たたみ}も取り拂^{はら}ひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世の例^{あは}も思ひ知られて、哀なれ。大^{おほ}路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前をこ、ら行交^{ゆきま}ふ人の、見知れるが^あまたあるにて知りぬ、世の人数もさのみは多^{おほ}からぬにこそ。この人みな失^うせなん後、我身死ぬべきに定^{さだ}りたりとも、ほどなく待つ^{まち}つけぬべし。（中略）若^{わか}きにもよらず、強^{つよ}きにもよらず、思ひかけぬは死期^{しじ}なり。今日^{けふ}まで逃^{のが}れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫^{しば}しも世をのどかには思ひなんや。（中略）兵の軍に出るは、死に近^{ちか}きことを知て、家をも忘れ、身をも忘^{わす}る。世を背^{そむ}ける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、これを余所に聞^きと思へるは、いとかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき競^きひ來らざら

んや。その死にのぞめる事、軍の陳（ママ）に進めるに同じ。

1. 「花は盛りに」一段の論旨

「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは」の有名な一文は、「萬の事も、始終こそをかしけれ」に繋がり、「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは」へと展開する。右の引用では省略した、その具体例として、月を「闇のうちながらも思へる」こと、「よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまも等閑」なることを挙げる。これに対比されるのが、「片田舎の人」である。「片田舎の人」は、「色こく萬はもて興」じ、盛りの「花の本には、ねちより立ち寄り」、「はては、大きな枝、心なく折取」る。祭では、「見事」が通るまでは棧敷に出ず、「たゞ物をのみ見んとする」様である。

しかし、祭は、「明はなれぬほど」から「をかくも、きら／＼しくも」あり、「見るもつれ／＼なら」ぬものが「さま／＼に行交ふ」。それが、「暮るほどには」、「目の前にさびしげになりゆくこそ、世の例なほも思ひ知られて、哀なれ」と言う。

以後、命が終わることのみを論述する。

「見知れる」人が祭に多いことから、「世の人数もさのみは多からぬ」ことを知り、「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり」といかなる人の死期も予測できないことを記す。今日生きているのは、「ありがたき不思議」であつて、「暫しも世をのどかには」思えない。「軍に出る」兵は、「死に近きことを知」る。軍と程遠いと思われている「世を背ける草の庵」にも「無常のかたき」

は「競ひ來」り、「死にのぞめる事」は「軍の陳（陣）の誤り）に進めるに同じ」と説く。

万事に始めと終わりとが有り、終わりにこそ「哀」が宿る。本段の論旨は、一貫している。

2. 「大路見たるこそ」本文の問題点

論旨を捉えた上で本段全体を読み返すと、中ほどの二重傍線部「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」が文脈に合わないことに気づかれる。

なぜならば、「哀なれ」に続く「大路」には、行列が大路を渡る、祭最盛時の様子も含まれる、と一般に解釈されているからである。「哀なれ」までの前文で祭の終わりに焦点を絞ったにもかかわらず、「大路」から始まる二重傍線部で、祭の前後を含む長い時空間に戻る。これでは、次文以降の命終の話に繋がらない。

さらに、二重傍線部「大路」に祭最盛時の様子も含まれるとする現在通行の解釈は、物事の盛りのさまを直に見て愛でることを勧めない本段の記述にも合致しない。

ところが、この二重傍線部を「とおほ（覚）えたるこそ、祭見たるにてはあれ」とする写本群が有る。この本文であれば、祭が終わる、見る見る「さびしげになりゆく」様に、「世の例も思ひ知られてあはれなれと覚えたるこそ」、祭を見たということである、と述べていることとなり、後の本文に抵抗なく続く。

3. 本稿の目的

「大路見たるこそ、祭見たるにははあれ」の流布本本文には、右の問題点が存する。

本稿は、「大路見たるこそ」は、『徒然草』成立時には「とおほ(覚)えたるこそ」の本文であったことの論証を目的とする。

二、「大路見たるこそ」本文についての先行研究

古文献本文に疑問が生じた場合、他本の本文を参照するのが定石である。

1. 高乗勲『徒然草の研究』の諸本本文

『徒然草』の諸本を博搜した最初の校本として、高乗勲『徒然草の研究』(一九六八年、自治日報社)が有る。高乗(一九六八)は、本稿で問題とする箇所について、次の諸本校異を記す(「見」を字母とする文字は当該箇所では漢字と認定して、仮名と区別した上で、異文をA・B・Cに分けて挙げた)。

なお、本稿の筆者は、『徒然草』第九十二段の「得失」は「後矢」、第百六段の「證空」は「證光」が『徒然草』本来の本文であること⁽⁸⁾を説いた。そこで、この二箇所とも本来の本文である本には◎、どちらか一方が本来の本文である本には○を、頭に付す⁽⁹⁾。

A. とおほえたるこそ—◎正徹本・◎陽明文庫本(訂正前)・○常縁本・御所本(62.54、室町末期写桂宮本)。

B. と大路見たるこそ—小堀遠州書写本(田中重太郎旧蔵本相

愛大学・春28)・万治二年刊本(国文研89-37)・整版十

一行本(国文研89-29)。

C. 大路見たるこそ—嵯峨本・偏易書写本(国文研高乗89-1)・

伝中和門院書写本(同上89-1b)・田中忠三郎氏蔵本・若

林正治氏蔵東坊城大納言所持本。

大路見たるこそ—烏丸本。

右のうち、影印本やインターネット上に公開画像が存する数本の該当箇所を、その公開画像から引用する。

A. とおほえたるこそ

ア正徹本

イ陽明文庫本

ウ常縁本

B. と大路見たるこそ

エ万治二年刊本

オ小堀遠州書写本



C. 大路み（見）たるこそ

カ嵯峨本



キ鳥丸本



A「とおほえたるこそ」、B「と大路見たるこそ」、C「大路み（見）たるこそ」であるから、「と」が有るAとBとが近く、「大路」が一致するBとCとが近い。

Aの諸本は、現存最古の正徹本（永享三年（一四三二）写本）を初め、すべて室町時代の書写にかかる。また、Aには、古い本文を伝える本（◎○が付される本）が属する。

一方、Bには江戸時代の写刊本しかない。

祖本からAとBとが分かれ、BからCが生じた、という本文変化も想定可能である。

しかし、右の実態からは、A↓B↓Cが最も可能性が高い変化である。

2. 高乗勲の解釈

高乗勲（一九六八）は、「目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひしられて哀なれ、大路見たるこそ祭見たるにてはあれ」の一文について、次のように述べた。

（前略）

正、陽、宝、八、常、桂、所の諸本は、「あはれなれ、おほぢみたるこそ」を、「あはれなれと、おほえたるこそ」としている。

この正徹本等の本文に従っても意は通じ、祭の過ぎた後のうつりかわりを見て世のためしが思いしられてあわれを感じるのので祭を見たことになるのだという意になる。しかし兼好の書いているのは単に祭の後の情景ではない。（中略）、正徹本等の本文に従えば、祭の過ぎた後だけについて述べたことになり、兼好の本意ではないと考えられる。（中略）。おそらくこの部分は正徹本等の諸本の元本は仮名書されていたので、その仮名読みの誤りからきた誤写であり、しかも正徹本同類本だけでなく、桂宮本系の本文もこれと一致していることは両系統の祖本において既にこのようになっていたもので、その誤写がかなり古く、原作より程遠からぬ伝写本の誤写かとうかがわれるのである。

（以下、略）

（八七九・八八〇頁）

多数の古写刊本を校合した高乗は、A「とおほえたるこそ」の本文が「原作より程遠からぬ」本文であることを導いた。

しかし、Aの本文では、「祭の過ぎた後だけについて述べたことにな」という理由から、A「とおほえたるこそ」はC「おほぢみたるこそ」を誤写した本文である、とした。

高乗は、この箇所では、本文校訂によって得られた最古の本文より、自己の解釈を優先した。

3. 久保田淳の推測

その後、久保田淳（一九九八）^⑩は、正徹本「あはれなれと覚えた

るこそ」の本文に左の注を付し、流布本「あはれなれ。大路見たるこそ」に先立つ本文ではないか、と疑った。

しみじみと感じられることが。流布本と大きく相違する部分である。流布本のような表現によってこの段落に一つのしめくくりが付けられるような気もするが、あるいは正徹本のこのような表現が元の形をとどめているか。(以下、略)

しかし、陽明文庫本・常縁本等を「校異」に掲げながらも、右の引用省略部分に、『壽命院抄』の「祭ノ大路ノ体ヲ見タルニテ世間ノ盛衰物ノ哀ヲ知コソ本意ナレト云心也」以下、江戸時代の古注を引いて終わる。

久保田淳(一九九八)は、「あはれなれと覚えたるこそ」が「元の形をとどめているか」と推測を述べるに留まった。

4. 「大路見たるこそ」本文研究の現状

以上、「と覚えたるこそ」の本文が最古形本文であることは推定されながらも、明言も証明もされていない。

三、「大路見たるこそ」部分の本文批評 (Textkritik)

1. 諸本本文の実態

現在では、高乗(一九六八)が校異に使用しなかった諸本も、比較的容易に閲覧することができる。

そこで、それら諸本についても当該箇所本文を調査する。⁽¹¹⁾

こいでも、二一と同様の基準で、◎○を付す。なお、C「大路見

たるこそ」とする近世の写刊本は多数存するため、比較的古い本を挙げるに留めた。また、挙例・分類が煩瑣となるため、原本に加点された濁点・区切り点の有無は捨象する。

A. とおほえ・とおほへ・と覚え

①とおほえたるこそ—◎神宮文庫蔵本(国文研219434)・◎国文研蔵慶長頃写打曇表紙本(高乗88113)・◎東海大学蔵本(桃196)・◎同蔵藍表紙本(桃198)・◎同蔵本(桃1916)・◎龍門文庫蔵天正十五年写本・◎静嘉堂文庫蔵本(5027)・◎国文研蔵慶長初年雲母刷古活字版(高乗9993)・◎慶長初年古活字版・東海大学蔵本(桃1926)・細川本(東京大学国語研究室蔵本)・白杵図書館蔵江戸初期写本(三門和14号)・国文学研究資料館寄託松井明之氏蔵慶長八年(一六〇三)写本(マ3165)・蓬左文庫蔵江戸初期写本(107-22)・岸上慎三蔵江戸初期写本⁽¹²⁾・叡山文庫蔵中院通勝筆本⁽¹³⁾。

と覚えたるこそ—◎国文学研究資料館寄託中田光子氏蔵本(ナ3-11)・◎八坂神社蔵本。

と覚たるこそ—◎国文研蔵室町時代末期写浄教坊本(高乗89-12)・◎東海大学蔵本(桃1915)・鶴見大学蔵室町時代末期写本。

②とおほへ見たるこそ—永青文庫蔵細川忠興筆本(41466)。

と覚え見たるこそ—今治市河野美術館蔵梶井殿蜻菴筆本(116-457)。

B. とおほち・と大路

①とおほちみるこそ—今治市河野美術館蔵室町期写本(116-466)。

とおぼち見るこそ—大妻女子大学蔵永祿六年(一五六三)写本。

- ②と大路見たるこそ—国文研蔵寛永二十一年(一六四五)写本(高乗89-16)・同蔵本(高乗89-17)・今治市河野美術館蔵明暦二年(一六五六)写本(116-469)・同蔵本(118-465)・ベルリン国立図書館蔵江戸初期写本(Libri japon.159)・東海大学蔵元文五年(一七四〇)写本(桃19-41)・筑波大学附属図書館蔵本(6-11-1 F125)。

と大路みたるこそ—国文研蔵本(高乗89-19)。

- と大路見たるこそ—大東急記念文庫蔵素庵筆本(32函7架)・長野市旧真田家文庫蔵江戸初期写本(28-21-1 F28)・国文研蔵本(高乗89-9)・同(高乗89-11)・同(高乗89-18)・京都歴史彩館蔵本(特和914.45 H94)・岩瀬文庫蔵本(41-13)・学習院大日語日文蔵本(216-281-2)・大阪府立大学学術情報センター蔵本(244-238-5)・八戸市立図書館蔵本(96-194-1)。
- と大路見たるこそ—早稲田大学蔵江戸初期写本(文庫30_e0099)・宇和島伊達文庫蔵本(一般・224)・正保二年(一六四五)刊本(京都大学図書館10-05-1)。

と大路見たるこそ—国文研蔵本(高乗89-10)。

C. おぼち・大路

とおぼちみたるこそ—京都大学図書館蔵菊亭家旧蔵本・岩瀬文庫蔵本(71-28)。

おぼち見たるこそ—東海大学蔵本(桃19-28)・岩瀬文庫蔵本(66-41)。

大路みたるこそ—金澤文庫蔵烏丸光広筆本(914-687)・東大史料

編纂所蔵江戸初期写本(貴22-20)・早稲田大学蔵江戸中期写本(文庫30_e0098)・東海大学蔵本(桃19-24)・同(桃19-39)・同(桃19-42)・同(桃19-43)・同(桃19-44)・今治市河野美術館蔵本(116-455)・同(118-463)・天理図書館蔵本(914.5-13)・同(914.5-17)・東洋文庫蔵古活字版(三1-B-a-19)・同(三1-B-a-20)・同(三1-A-d-47)。

大路みたる社—書陵部蔵室町中期写本(谷・27)。

大路見たるこそ—東海大学蔵室町期写流布本(桃19-33)・同蔵本(桃19-36)・龍谷大学蔵室町期写本(021-533-2)・今治市河野美術館蔵持明院前中納言基時卿筆本(116-464)・同蔵本(116-456)・同(117-460)・同(117-461)・同(117-462)・同(117-467)・同(117-468)・同(117-470)・同(118-458)・國學院大學蔵室町期写本(貴1720)・専修大学図書館蔵江戸初期写本。

右のとおり、『徒然草』現存諸本の該当箇所本文は、A「とおぼち(覚え)」、B「とおぼち(大路)」、C「おぼち(大路)」の三類に分かれる。

2. 古い本文を伝える本

高乗(一九六八)が校異に使用しなかった諸本においても、古い本文を伝える本(◎が付される本)の大部分はA①に属し、B①にも◎が付く本が二本有る。

しかし、大量に残存する本文Cの諸本には、右に掲出を省略した本を含め、古い本文を伝える本は皆無である。

よって、A①・B①・Cの順で変化した、と考えられる。

3. A「おほえ」とB・C「おほち」の成立順

「覚え」と「大路」との交替は、高乗（一九六八）も推測したとお
り、仮名書きの「おほえ」と「おほち」との誤写によって生じたも
のであろう。

「覚え」を仮名書きした写本・刊本は、多数にのぼる。

「大路」の仮名書き例も、珍しいものではない。たとえば、正徹本
『徒然草』では、「おほち」二例（上018-07・下036-09）、「大路」二
例（上067-05・上069-08）で、仮名・漢字は同数である。

「おほえ」を「おほち」と写すこと、またその逆の書写は、双方、
起りうる。

しかし、A「とおほえ」の写本は、正徹本以下二十本以上現存する
一方、B①「とおほち」とする写本は、今治市河野美術館蔵室町期写
本と大妻女子大学蔵永祿六年写本の二本しか見出せない。この二本
は、細川本系統とされている。¹⁵細川本は、東京大学国語研究室蔵
本・白杵図書館蔵本「とおほえたるこそ」、永青文庫蔵細川忠興筆本
「とおほへ見たるこそ」である。よって、B①の二本も本来は「とお
ほえ」の本文であった、と考えられる。B①「とおほちみるこそ」
「とおほち見るこそ」は、先に画像を示したウ常緑本のように書写さ
れた「とおほえたるこそ」を「とおほちみるこそ」と誤写したもの
であろう。

したがって、A「おほえ」↓B・C「おほち」の流れであった、と考
えられる。

4. A②「と覚え見たるこそ」・B②「と大路見たるこそ」本文の生成

A②の二本「とおほへ見たるこそ」「と覚え見たるこそ」の本文は、
イ陽明文庫本に用いられている「盈」の仮名を「へみ」あるいは
「ゑみ」と読んで生じたものであろう。

また、B②は、「みる」を「みたる」とし、漢字を当てた本文であ
る。イ陽明文庫本のごとき「えたる（盈堂留）」を「ちみたる」と写
したのもかもしれないし、A②「とおほへみたるこそ」から生まれた
本文かもしれない。ともに、生じうる転写であらう。

5. 「と」の有無

A「とおほえ」・B「とおほち」とC「おほち」とは、「と」の有無で
異なる。

正徹本等のA本文は、「暮るほどには」「世の例も思ひ知られて哀
なれと覚えたるこそ、祭見たるにてはあれ」となり、以後の文意に
素直に繋がることは、第一節2で確認した。

B「と大路みたるこそ」の「と」も、前文「暮るほどには、（中略）
世の例も思ひ知られて哀なれ」を受ける。賑わった祭も、「暮るほ
どには」「世の例も思ひ知られて哀なれと大路みたるこそ、祭見た
るにてはあれ」のB本文は、祭の終わりの大路の様子を見て哀れを
感じる事こそが祭を見たことである、の意となる。これでも文意は
通じるため、比較的多くの写本がBの本文を探るのであろう。

ところがここに、祭日の早朝・盛時・終了後の情景絵てを本段は
描いているから、「大路見たる」は祭日全時間帯の大路を見ることで
ある、とする、次節に引く江戸時代の古注釈書に残る解釈が生じた。

それ故、前文のみを承接する「と」¹⁶⁾は、転写の過程で意図的に削除された、と推測される。

この推測が正しければ、「と」の無い本文Cは、本文A・Bより後の成立である。

ただし、その本文Cを持つ室町時代の写本が存する。よって、この「と」の削除（あるいは誤脱）は、室町時代には行なわれていた。

6. A・B・C本文の成立順

以上、対象文献を増やした本文批評によっても、当該本文はA↓B↓Cの順で成立した、と考えられた。

より細かくは、A①↓A②、B①↓B②と変化したものと推定された。

ただし、A②を経ずともB①は生じうるし、B②を経由せずともC本文は生じうる。

四、「大路見たるこそ」本文再考

1. 「大路見たるこそ」本文の定着理由

では、最新の本文C「大路見たるこそ」は、なぜ流布・定着したのであろうか。

代表的な『徒然草』古注のうち、比較的早く刊行されたものの当該注を、左に引用する。

i 『徒然草寿命院抄』（一六〇一年）

大路ミタルコソ 祭ノ大路ノ體ヲ見タルニテ世間ノ盛衰物ノ哀

ヲ知コソ本意ナレト云心也

ii 『野槌』（一六二二年）

大路をみたるこそ 見物群集クシユの人の皆ついいは死べければ・我も其数にいらんと也（『徒然草鉄槌』（一六四八年）・『なくさみ草』（一六五二年）も同文注。）

iii 『徒然草句解』（一六六一年。《》内は、割注。）

大路見たるこそ祭見たるにてはあれ《祭の日の大路の躰を見て世の治乱盛衰人の生死無常道を觀しぬれば祭見たる徳分は大路見たるにこそあれとなり》

iv 『徒然草磐扇抄』（一六六一年）

大路みたるこそまつりみたるにてはあれは結語也。かゝることよりはを觀するたよりなれば大路をみたるがまつりといふものよと也

v 『徒然草文段抄』（一六六七年）

大路みたるこそ 是又決前生後の詞也

右のごとく、「大路みたるこそ」を、i 『寿命院抄』 iii 『句解』 iv 『磐扇抄』は一日の大路の移ろいに哀れを觀することこそ祭の本意であるとの「結語」と解釈し、ii 『野槌』は次文以降を導く文と解釈する。v 『文段抄』の「決前生後の詞」（前をまとめ後を起こす言葉）は、これら先行注を合わせたものである。

これらの注は、唐突な本文C「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」を文脈に位置づけるために必要とされたものである。

また、大多数の『徒然草』古写刊本は、長文の「花はさかりに」章段を、途中で分けることなく、末文まで一続きに書く。古来の注

釈書が依拠する烏丸本や嵯峨本でも、「花は盛りに」段のいずれの行末にも空きは無い¹⁷⁾。

ところが、冒頭に引用した日本古典文学大系多くの現行注釈書は、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」を段落末文とし、改行して、「かの棧敷の」以降を新段落とする。

これも、v北村季吟『徒然草文段抄』（二六六七年刊）以来の段落分けに基づく。これは、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」で話を大きく切るための段落分けである。

このような解釈と段落分けとによって、「大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」の一文が祭の話題の総括であると広く理解され、「大路見たるこそ」の本文が流布・定着したものと思われる。

2. 鎌倉時代語としての「大路見たるこそ」

だが、「大路」を「見る」という日本語表現は、鎌倉時代において特別なものである。

試みに、「日本語歴史コーパス」で、「大路」に動詞が直接続く例を検索すると、「大路」を目的語とする動詞は、「渡る」「通る」「行く」「走る」「吹く」しかない。

また、名詞+「見たり」を「日本語歴史コーパス」で検索すると、「見る」対象は、「花・月・紅葉・けしき・夢・祭・鏡・顔」等であり、「大路」のごとき場所を「見る」用例は得られない。

名詞+「見る」の検索結果における「見る」対象でも、場所は少数である。それらは、「わかものうら」「玉津島」「衣河」「川原」「川門」などであり、歌中の例が大部分を占める。歌以外の本文でも、「所々

見行きけり」(宇治拾遺物語)、「歌枕見て参れ」(十訓抄)、「海見はるかしたるは」(「とはすがたり」)など、眺める対象は名所・景物である。

古語辞典類にも記されるとおり、「見る」は、「自分の意志で見る」のであって、「自然の成り行きとして見る状態になる」「見ゆ」とは区別された。本段冒頭文「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは」は、「見る」の基本的用法を象徴する用例である。

『日本語歴史コーパス』は、現時点では、鎌倉時代対象文献が少ない上、文学作品に偏るため、『黒谷上人語燈録』元亨元年(二二二二)刊本で、「見る」の対象を調査した。この文献でも、「見る」対象は「見んとおもふ物・化佛の來迎・浄土の莊嚴・文・釋・經教・聖教・録・かさおきたるもの・おしへ・法・心・ほとけ・よろつの人・念佛を行する人・善人・悪人・女人・業因・月・飛花落葉」などであり、それらに意識的に目を向ける場合に、「見る」が使用されている。

それ故、意識的に目を向ける場合は、「大河」や「白道」も、「見る」対象となつている。「二河白道」として著名な話を引用した左の箇所である。

忽然としてこの大河を見るにすなはち念言すらく(二三5オ7)
中間に一つの白道を見る(二三5ウ2)

このように、その状況下で注目される場合は、道や河も「見る」対象となつた。

『徒然草』の「暮るほどには、(中略)、目の前にさびしげになりゆくこそ、世の例も思ひ知られて、哀なれ。大路見たるこそ、祭見た

るにてはあれ。」も、祭日の「暮るほど」の「大路」を注目せよとの意味に解釈（三節5のB本文の解釈）すれば、「大路」を「見る」ことを取り立てることはあり得た。

しかし、「哀なれ。」で切れる前文に続く文頭の「大路」を、「暮るほど」の「大路」であると解することは、難しい。

まして、「祭日の明け方から夕暮れまでの都大路のありさまのすべて」と解釈することは、前節に引用した古注の如く、本文に無い多くの言葉を補わねば、不可能である。

以上から、「世の例も思ひ知られて、哀なれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ」は、鎌倉時代には成立しがたい文章である、と判断される。

五、むすび — あはれなれと覚えたるこそ祭見たるにてはあれ —

「〜祭見たるにてはあれ」に続く「かの棧敷の前を」以降は、命終の話題であるものの、「かの棧敷」は祭の棧敷を指す。その直前に祭見物の総括文が有ったのでは、「かの棧敷」以降の文章に続かない。祭が終わり、「目の前にさびしげになりゆく」様子から、「世の例も思ひ知られてあはれなれと覚えたるこそ、祭見たるにてはあれ」と述べる本文であつてこそ、自身の死も「ほどなく待つけぬべし」とする後文に無理なく連続し、本段の文脈に適う。

本稿の検討によって、『徒然草』「花は盛りに」段の流布本本文「大路見たるこそ」は、本来、「とおほえたるこそ」であつたことが判明した。

古典本文には異文が生じ、それぞれの時代の流布本文がある。本稿は、それらの本文に優劣を付けようとするものではない。

しかし、成立時の『徒然草』を読解しようとする場合、あるいは、『徒然草』を鎌倉時代後期の言語資料とする場合は、成立時本文の復原を試み、それに依らなければならない。

注

(1) 島内裕子『徒然草』(二〇一〇年、筑摩書房)は、『徒然草』全体を通して、最大・最高の章段である。(275頁)とする。

(2) 高乗勲『徒然草の研究』(一九六八年、自治日報社)八七二頁は、この段が、『徒然草』成立時から下巻巻頭であつたと推定している。

(3) 松永貞徳『なぐさみ草』(二六五二年自跋)・北村季吟『徒然草文段抄』(二六六七年刊)以来、現行諸注釈書が採る全二四四段の章段区分による。

(4) 「いくさの陣」を、古い本文を伝える諸本は「かたきの陣」とする。よつて、成立時本文は「かたきの陣」であつた、と考えられる。「いくさの陣」に行くより、「かたきの陣」に進むほうが、より「死にのぞめる事」であろう。

(5) 本段冒頭の「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか」を本居宣長が批判していることは広く知られ、高等学校の教科書にも両者を並載するものがある(『精選古文B』(二〇一九年、東京書籍)。左に、宣長『玉勝間』の『徒然草』本段批判文を、部分引用する。

けんかうほうしがつれぐ草に、花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かはとかいへるは、いかにぞや、いにしへの哥どもに、花はさかりなる。月はくまなきを見たるよりも、花のもとには、風をかこち、月の夜は、雲をいとひ、あるはまををしむ心づくしをよめるぞ多くて、こゝろ深きも、ことにさる哥におほかるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく、月はくまなからむことをおもふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを歎きたるなれ、いづこの哥にかは、花に風をまち、月に雲をねがひたるはあらん、さるをかのほうしがいへることくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくり風流ミヤビにして、まことのみやびごと、ろにはあらず、かのほうしがいへる言ども、此たぐひ多し、皆同じ事也。

(文化九年刊本、四の巻・四十五オウ)
しかし、『徒然草』本段は、「風流」を論じてはいない。

(6) 「大路見たるこそ、祭見たるにはあれ」について、現在の『徒然草』注釈書における解釈を知るため、参照されることが多いと思われる訳注を、刊行が新しい順に数点引用する。

- a. 都大路を見てこそ、祭を見たといえるのである。
- b. (小川剛生訳注『新版徒然草』(二〇一五年、角川学芸出版)) この一日の明け方から夕暮れまで、都大路のありさまのすべてを見るのこそ、本当に賀茂祭を見たということになるのだ。華やかな行列を見るのだけが、祭を体感することではない。

(鳥内裕子『徒然草』(二〇一〇年、筑摩書房))

c. 都大路の有様を見ているのこそ、祭を見ているということなのである。(永積安明校注・訳『新編 日本古典文学全集 44』(一九九五年、小学館))

d. 祭の行列だけではなく、この日の大通りの有様を見ているのこそ、実は祭を見ていることなのである。(安良岡康作『徒然草全注釈 下巻』(一九六八年、角川書店))

e. (行列は見なくても、この日の、こうした) 大路を見てこそ、ほんとうに祭を見たと言えるのだ。(西尾實校注『日本古典文学大系 30』(一九五七年、岩波書店))

いづれも、前文までの祭の描写を総括する一文として、「祭日の大路の有様全体を見たことが祭を見たことである」の意に取っている。内田樹訳『徒然草』(『日本文学全集 07』(二〇一六年、河出出版) 収載)・三木紀人『徒然草 (三) 全訳注』(一九八二年、講談社)・木藤才蔵校注『徒然草』(一九七七年、新潮社)なども同様である。これらの注釈書は、すべて鳥丸本を底本とする。

一方、鳥丸本以外を底本とする注釈書も存する。左の f g は正徹本、h は常縁本、i は慶長初年刊雲母摺古活字版を底本とする。「大路見たるこそ」相当部分は、f g 正徹本・h 常縁本「とおほえたるこそ」、i 慶長初年古活字版「とおほえたるこそ」の本文である。それに、左の訳注を付す。

f. と感慨にふけるのが、祭を見物したということの意味なのである。

(久保田淳校注『新 日本古典文学大系 39』(一九八九年、岩

波書店)

g. と思つたのが、ほんとうにまつりを見たといふものである。

(川瀬一馬校註『新註國文學叢書 徒然草』(一九五〇年、大日本雄辯會講談社))

h. と、感じたことこそ、祭を見るのであるのだ。

(村井順『常縁本徒然草』(一九六七年、桜楓社))
i. と感じたのこそは、本当に祭を見たというものである。

(川瀬一馬校註『徒然草』(一九七一年、講談社))

祭の終わりに哀れを感じてこそ祭を見たと言える、とする f~i の解釈であれば、祭終了時の前文を承け、次文以降に無理なく展開できる。

(7) 「明はなれぬほど」の一文に続く、「をかしくも、きら／＼しくも、さまざまに行交ふ、見るもつれ／＼ならず。」の「行交ふ」を、「そうこうしているうちに祭が始まり、面白くもあり、また華やかな燦めきが素晴らしくもあり、さまざまに様子で行列が過ぎてゆく。それを見ていると、本当に飽きることなく、あつという間に、祭の一日が終わってしまふ。」と祭の行列が「行交ふ」と解釈するものがある(注(1) 島内著書73頁)。しかし、ここで「行交ふ」のは、「明はなれぬほど、忍びて寄する車ども」と読むのが素直である。

(8) 佐々木勇『徒然草』第九十二段の「得失」(『國語國文』第87巻第3号、二〇一八年三月)、同『徒然草』第百六段の「高野證空上人」(『國語國文』第87巻第12号、二〇一八年十二月)。

(9) そのため、高乗(一九六八)で「正徹本系」「貞徳類」などとされているものを、一本に限定した。また、各本の略称を本来の呼称に戻して引用した。ただし、王堂旧藏本「とおほしみたるこそ」は、大西善明『つれ／＼草』(一九七七年、おうふう)の校異では「覚えみたる」とあつて異なり、底本を特定できないため、ここには挙げない。

(10) 『徒然草評釈・二百三十名篇の新しい評釈 何となく葵掛けわたし』(『国文学 解釈と教材の研究』43・12、一九九八年十一月、学燈社)。なお、久保田は、正徹本『徒然草』本文を重視しており、新日本古典文学大系39所収の『徒然草』でも、正徹本を底本とする。

(11) 複製本が刊行されているもの、新日本古典籍総合データベース、日本古典籍総合目録データベース、国会図書館、内閣文庫、早稲田大学、龍谷大学、東洋文庫等で公開されている画像を参照し、東海大学・今治市河野美術館・大東急記念文庫・金澤文庫・静嘉堂文庫で原本調査を行なった。諸機関に感謝申し上げます。

(12) 注(6) 川瀬著書の翻刻に依る。

(13) 斎藤彰『徒然草の研究』(一九九八年、風間書房)の資料編に依る。

(14) 桑原博史『徒然草常縁本系統の研究——底本の性格——』(福田秀一・桑原博史『常縁本徒然草』(一九六八年、大修館書店)所収)に依る。

(15) 桑原博史『徒然草研究序説』(一九七六年、明治書院)一五五

頁、斎藤彰『徒然草の研究』五二頁、稲葉二柄「大妻女子大学図書館蔵『徒然草』（永祿六年写）の書誌」（『大妻女子大学紀要（文系）』34、二〇〇二年三月。大妻文庫『徒然草』（二〇一一年、新典社）の解題として再録）、参照。

(16) この「と」に濁点を打ち、接続助詞「ど」とする写本も少数存する。しかし、「世の例も思ひ知られて哀なれ」と「大路みたるこそ、祭見たるにはあれ」とを逆接で結ぶ解釈は、理解しがたい。そのため、「ど」も、削除されることとなったのである。

(17) ただし、「怠る間なく洩りゆかば、やがて盡きぬべし」で当該行を終え、「都のうちにおほき人、死なざる日はあるべからず」以降を改行して、別段として書写する本は存する（東海大学蔵江戸初期写本（桃19-15）・静嘉堂文庫蔵本（G051）等）。

(18) 「見たり」は、語彙素「見る」+語彙素「たり」で検索した。検索は、二〇二一年十一月八日に行なった。

(19) 『角川古語大辞典』（一九九九年、角川書店）「見ゆ」の語釈から引用した。「新中納言「見るべき程の事は見つ、いまは自害せん」とて」（『平家物語』〈『日本古典文学大系』33巻（一九五九年、岩波書店）342頁〉）は、「自分の意志で見る」ことの、わかりやすい用例である。

(20) 龍谷大学図書館蔵『黒谷上人語燈録』（021-2347）。全文のカラー写真が、龍谷大学図書館 貴重書画像データベースで公開されている。検索には、卒業生と共に作成した『龍谷大学図書館蔵 黒谷上人語燈録元亨版 翻刻および総索引』（二〇二〇年、

勉誠出版）を用いた。

(21) 「大路見たるこそ、祭見たるにはあれ」の文から、「筆者のもの見方を説明してみよう。」という「学習」を設定している教科書が有る。

しかし、この流布本本文から、「筆者のもの見方」を説明することはできない。

（広島大学）